

あ と が き

保健管理センター助教 伊藤大輔

本号は平成 23 年度（2011 年度）の業務報告になります。この業務報告を概観すると、学内外の幅広いニーズに応える形で、保健管理センターの役割や機能が広がりを持ちつつあることを実感させられる内容になっているかと思えます。例えば、健康診断などを中心とした身体に関わる健康やリスクの管理を目的とした業務とともに、学生や教職員を対象とした相談などを中心としたメンタルヘルスや精神衛生の管理を目的とした業務も増加しているのも 1 つの変化ではないでしょうか。

先月、学生相談メンタルヘルス研修会に参加し、各大学の教職員の方々と意見交換をする機会がありましたが、うつ病や不安障害、発達障害などが疑われる学生や教職員に対応する機会が増えている印象を受けるというお話が多く聞かれました。また、全国大学保健管理協会研究集会で開かれた日米英の国際シンポジウムでは、文化によって、大学で生じる問題やその対応については差異があるものの、学生や教職員のメンタルヘルスに関する問題は増加傾向にあり、それらに対応していく必要があるという認識は一致しておりました。これらは、実際にメンタルヘルスの問題を抱える個人が実際に増加しているのか、あるいは診断やアセスメントの拡大解釈がなされたり、メンタルヘルスに関する一定の理解は得られたことによって、一見広がりを見せているように見えるのかもしれませんが。

もちろん、上記のような印象は、私が心理士であるが故にピックアップしている 1 つの例に過ぎません。しかしながら、保健管理センターに対するニーズが多様化していることは、多くのスタッフが実感していると思えますし、ニーズの広がりとともに、保健管理センターも柔軟に対応していく姿勢が求められているのは間違いないでしょう。スタッフ内で議論された保健管理センターの環境整備は、そのようなニーズに応じていくためには重要なことですし、長期的な視野を持って段階的に進めていく必要があります。そして、多様なニーズに対応していくためには、ハードの側面のみならず、各スタッフがチームとして連携し、機能させていくことが今以上に求められていると言えます。お互いの専門性を理解し、尊重し合う土壌の上に、各職種の専門性が発揮されれば、「本学の学生や教職員の健康増進」という目的のもと、一層効果的な業務や関わりが可能になるように思われます。

以上のようにニーズの多様化が進む中で、保健管理センターもその期待に応えられるように日々の業務や体制についても検討を進め、よりよいサービスを提供していくために、お互いが知恵を絞っていければと願っております。

2013 年 1 月